

ヘブリス的視点から見た

神の御住まいとなる教会

ベレーシート

●ヘレニズムは今や全世界に浸透している人間中心主義の文化です。このヘレニズムに対抗できる唯一の道は神中心のヘブライズムです。この両者には思惟概念の相克(衝突)があります。使徒パウロはヘレニズムを「この世の知恵」と呼び、ヘブライズムを「神の知恵」と呼んでいます。この両者には何のつながりも、まじわりも、調和も、かかわりも、一致もないことを強調し、「つり合わぬくびきをいっしょにつけてはならない」と述べています(Ⅱコリント 6:14~18)。これはやみと光との衝突であり、御国が完全に到来する日まで続きます。前回の「ヘブル・ミドゥラーシュ」で取り上げた「光の祭典」と呼ばれるユダヤ教の「ハヌカの祭り」を記したマカバイ記は、このテーマが扱われていることをお話いたしました。つまり、ギリシアの王アンティオコス 4 世エピファネスによる反ユダヤ主義台頭に対する戦いです。この「反ユダヤ主義」(アンチセミティズム)はキリスト教会の歴史の中に深く浸透し、聖書の解釈において今もなお大きな影響を与え続けています。

●メシアニック・ジューの一人、デイビット・H・スターン氏は「福音とユダヤ性の回復」という著書(監訳者:横山隆、マルコーシュ・パブリケーション出版、1995年)、原著は“Restoring the Jewishness of the Gospel” 1988)の中で、「教会が宣べ伝える福音の完全な真理とは、福音の中にユダヤ性を回復することにある。・・・その完全な真理とは、イスラエルという地に神があらかじめ計画し、備えられたユダヤ人を通して歴史的に具現されたすべての人々に普遍的に共通する真理であり、もし教会がそれを回復しなければ、福音の主要部分を欠くことになり、必然的に正しく大宣教命令を達成することができないばかりか、その結果、ユダヤ人は『諸国民の光』になれない。」と述べています。この警告は使徒パウロが異邦人クリスチャンに対して発した以下の警告に基づいています。



【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 11章 18節

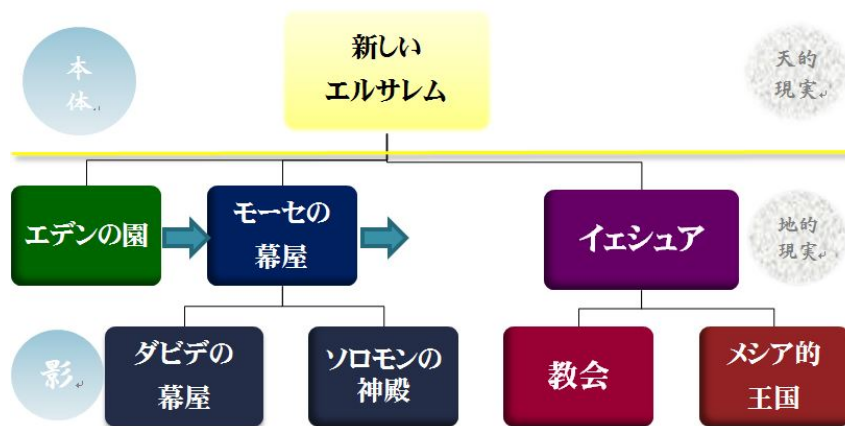
あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです。

●この警告を正しく受け止め、今回、パウロの手紙の中のエペソ人への手紙 2章 20~23節にある「神の御住まいとなる教会」から、ユダヤ性の回復について(つまり、ヘブリス的視点から)、私なりに検証したいと思います。「神の御住まいとなる教会」は、「神の幕屋(神の御住まい)が人とともにある」(黙示録 21:3)という神のご計画における究極のヴィジョンの型です。パウロはその型を「奥義」として語りましたが、それはすでに「モーセの幕屋」の中に啓示されていたのです。そのことを論証することを通して、スターン氏の言う「福音の中にユダヤ性を回復する」ことの必然性について考えてみたいと思います。「福音の中にユダヤ性を回復する」とは、換言すれば、聖書はヘブリス的視点から読まなければ正しく理解されないということになります。ヘブリス

的視点から聖書を読むことで、今までの私たちの聖書の読み方、理解の仕方が格段と変わってしまうのです。ヘブリス的視点から聖書を読むとはどういうことなのか、そのことを今回の「ヘブル・ミドゥラーシュ」でお話したいと思います。

1. 「神の御住まいとなる教会」の啓示的変遷における位置づけ

●神が人とともに住むという神のご計画を、神は歴史の中で以下のように目に見える形で現わして来られました。



●エデンの園の中にも、またモーセの幕屋の中にも、ダビデの幕屋やソロモンの神殿の中にもです。そして最終的には「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた(=幕屋を張られた)。」(ヨハネ 1:14)とあるように、神の御住まいは「イエシュア」を通して実現されました。イエシュアの昇天後はイエシュアをメシアと信じる教会がそのことを引き受け、キリストの再臨時に、本来の「神と人がともに住むこと」がこの地上に実現します。それが千年王国における「メシア的王国」です。しかしそれも天にある本体の影(写し)でしかありません。本体とは、古いものが過ぎ去ったあと、天から下りてくる「新しいエルサレム」であり、これこそが神と人がともに住む神の永遠のヴィジョンなのです。このような「神の御住まい」の啓示の変遷の中に「教会」が位置づけられています。

●「神の御住まいとなる教会」についての聖書箇所は、以下のエペソ人への手紙 2 章 20～22 節です。

【聖書箇所】【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 2 章 20～22 節

20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

22 このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

●20節は「あなたがたは」で始まり、22節では「あなたがたともに」となっています。「あなたがた」という呼びかけと同時に、パウロは「私たち」という言い方も繰り返し使っていますが、エペソ書での「私たち」とは、「ユダヤ人クリスチャン」と「異邦人クリスチャン」のことを意味しています。「あなたがた」という場合、2章12節にあるように、①「イスラエルの国から除外され」、②「約束の契約については外国人」、③「神もない人たち」のことで、「異邦人クリスチャン」のことに限定して使っています。ところが今や、キリストにあって、また御霊によって、「ユダヤ人クリスチャン」(メシアニック・ジュー)と「異邦人クリスチャン」が「ともに建てられる」ことによって、神の御住まいとなるとしています。「神の御住まい」とはヘブル語で「ミシュカーン・エローヒーム」(מִשְׁכַּן אֱלֹהִים)と言い、ギリシア語では「カトイケーテリオン・トゥー・セウ」(κατοικητήριον τοῦ θεοῦ)と言います。「あなたがたともに建てられ」の「ともに建てられ」は現在形受動態で、今もなお建て上げられ続けていることを意味しています。ちなみに、この「ともに建てられ」と訳されたギリシア語の「スノイコドメオー」(συνοικοδομέω)は、パウロの**新造語**で、この箇所にしかならわれていません。

●聖書には教会がいかなるものであるかを示すさまざまなたとえがあります。なぜなら、それは教会がひとつのたとえではとても表わしきれない存在だからです。エペソ書に限るならば、教会は1章23節にある「**キリストのからだ**」、2章10節にある「**神の作品**」、15節の「**新しいひとりの人(One New Man)**」、19節の「**神の家族**」、そして22節の「**神の御住まい**」です。さらには、6章10～17節にある「(真理のために)**戦う教会**」を挙げることができます。今回取り上げるのは、それらの中にあるひとつ、「**神の御住まいとなる建物としての教会**」です。今回のタイトルを「神の御住まいである教会」とせず、「神の御住まいとなる教会」としたのは、教会が神の御住まいとなるために、今も絶えず成長を続けていく必要があるからです。

●パウロは教会を「建物」にたとえています。私たちが教会と言うと、建物それ自体を想像してしまうことがありますが、教会は建物ではありません。建物自体がイコール教会というわけではありません。便宜上、そう言っているにすぎません。真の教会はだれの目にも見えるというものではありません。「キリストのからだ」にしても、「あっ、キリストのからだが見える」という言い方はしません。テキストをもう一度よく見てみると、組み合わせられた建物全体が成長するというふうに表現しています。からだであれば成長するという表現は理解できますが、建物が「成長する」というのは何か変です。しかしパウロがそのように言うのは、それは私たちが考えるような建物ではないからです。常に成長するいのちある建物、生きている建物、つまり、神とともに住む場としての聖なる宮を意味しています。そこに住むのはだれでしょうか。**キリストの教会の構成メンバーは、イエシュアをメシアと信じるユダヤ人と、同じくイエシュアをメシアと信じる異邦人です。このことは、パウロのいう「教会」を理解する上できわめて重要なのです。**

●今回の聖書のテキスト(2:20～22)から三つのことを取り上げます。第一は、「建物の基本構造とはなにか」ということ。第二は、「互いに組み合わせられるとはどういうことか」。そして第三は、「成長して神の御住まいとなるためのプロセス」についてです。

2. 建物の基本構造とはなにか

●建物の最も重要な部分はどこにあるでしょうか。イエシュアは「岩の上に自分の家を建てた賢い人」と「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」の話をされました。建物自体を見るならばどちらもなんら変わりません。ところが、雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたとき、建物を支えている最も大切な部分が露わになりました。「岩の上に自分の家を建てた人」の家は雨が降って洪水が押し寄せてもびくともしませんでした。しかし、「砂の上に自分の家を建てた人」の家はひどい倒れ方をしました。

●「岩の上に家を建てる」とは土台を深くすることです。ユダヤでは砂地のずっと下にある深い部分まで掘って土台を造ったのです。ですから、倒れることはありませんでした。このたとえが言わんとすることは、建物の最も大切な部分は土台にあること。その土台をイエシュアに置くことを教えているのです。私たちの信仰生活も、土台がどこに置かれているかを試されるときが必ずあります。普段は分からなくても、土台が露わにされるテストがあるということです。

●使徒パウロは、20 節で「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。」と語っています。「土台」と「礎石」とありますが、どう違うのでしょうか。新改訳は「礎石」と訳していますが、聖書によってその訳語は以下のように様々です。

- ①「かなめ石」(新共同訳)、②「隅のかしら石」(口語訳)、③「隅石」(永井訳)、④「土台石」(尾山訳)、⑤「最も重要な土台石」(L.B)・・・など。

●「礎石」とは建物の要の石として、建物を完成させる上でなくてはならない最も重要な石を意味しています。詩篇 118 篇にはこの「礎石」であるイエシュアを預言している箇所があります。しかも、神がそれを私たちに与えて下さったにもかかわらず、人はその石を何と捨ててしまったというものです。

【新改訳改訂第3版】詩篇 118 篇 22～24 節

22 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。

23 これは【主】のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。

24 これは、【主】が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。



●ここで語られている「家を建てる者たちの捨てた石」とは、実は、礎の石となるべく定められたイエシュア・のことを預言していたのです。そんな礎の石を捨ててしまえば家を建てることはできません。しかし神はその石を用いて(復活させて)、建物をしっかりと完成させる要の石とされたのです。「私たちの目には不思議なことである」とあります。

●建物の土台である「使徒と預言者」が語ったことばは、後に新約聖書として書き記されましたので、その土台は神のことばである「聖書」と言えます。しかしそれ以上にもっと重要な礎石(かしら石)がイエシュア・ハマシアッハです。イエシュアは弟子たちに「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない。」と

言われました。ですから、「わたしにとどまりなさい」「わたしのことばにとどまりなさい」「わたしの愛の中にとどまりなさい」と繰り返し話されました。これはとても大切です。御子イエシュアはいつも御父にとどまっていた。いつも御父のことばにとどまっていた。いつも御父の愛の中にとどまっていた。実はこの「とどまる」というかかわりが、今日のクリスチャンにおいてとても希薄です。

3. 組み合わせられ、ともに建て上げられるということ

21 この方にあつて、組み合わせられた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

22 このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

●21 節と 22 節は、同じことを別の表現で表しています。同義的パラレリズムです。使徒パウロはユダヤ人であり、この修辞法を知っているだけでなく、その達人です。21 節が 22 節では以下のように言い換えられています。

①21 節「この方にあつて」⇒ 22 節「このキリストにあつて」

②21 節「組み合わせられた建物の全体が成長し」⇒ 22 節「あなたがたもともに建てられ」

③21 節「主にある聖なる宮となる」⇒ 22 節「御霊によって神の御住まいとなる」

●ここで重要なことは、「私たち」(ユダヤ人)と「あなたがた」(異邦人)が「組み合わせられ」「ともに建てられる」ことです。そのことによって、キリストを礎石とした教会が神の御住まいとなるからです。そのことが「聖霊によって」可能となったことは頭では理解できますが、具体的にはどうということなのでしょうか。

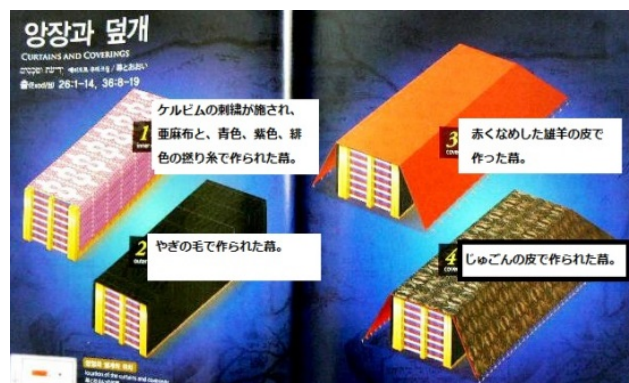
●「ユダヤ人」と「異邦人」が「互いに組み合わせられ(結び合わされ)、ともに建てられる」というこの神のヴィジョンは、実は、旧約の二つの事柄の中に、すでに啓示されていました。

① ひとつは、モーセの幕屋の本体をおおう四枚の幕のうちの内側の二枚の中に。

② もう一つは、主の例祭の「五旬節の祭り」でささげる二つのパンに。

これらのことは、聖書をヘブル的視点で読むときに、神のご計画を理解することができることを示唆しています。

(1) 幕を互いにつなぎ合わせて一つの幕屋にすること



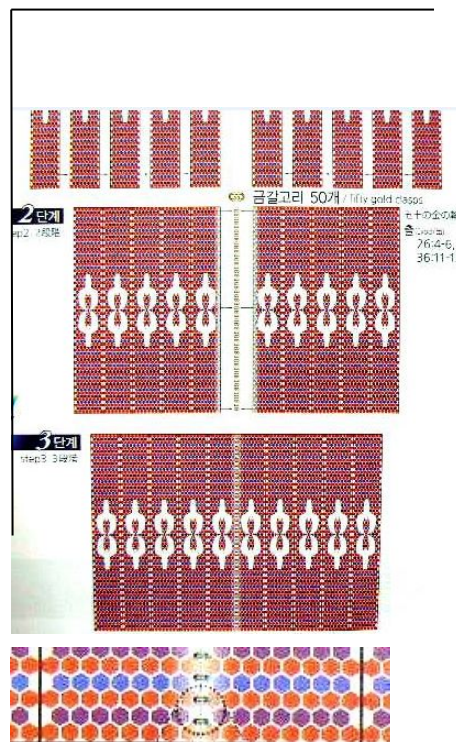
HEBREW MIDRASH No.8

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 26章 1～6節

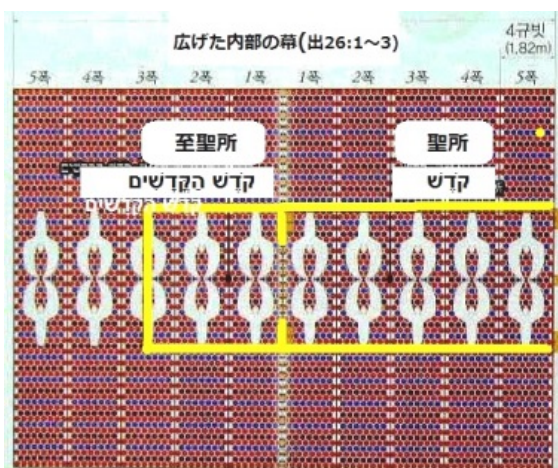
- 1 幕屋を十枚の幕で造らなければならない。すなわち、撚り糸で織った亜麻布、青色、紫色、緋色の撚り糸で作り、巧みな細工でそれにケルビムを織り出さなければならない。
- 2 幕の長さは、おのおの二十八キュビト、幕の幅は、おのおの四キュビト、幕はみな同じ寸法とする。
- 3 その五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、また他の五枚の幕も互いにつなぎ合わせなければならない。
- 4 そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に青いひもの輪をつける。他のつなぎ合わせたものの端にある幕の縁にも、そのようにしなければならない。
- 5 その一枚の幕に輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の端にも輪五十個をつけ、その輪を互いに向かい合わせにしなければならない。
- 6 金の留め金五十個を作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせて一つの幕屋にする。

●幕屋を覆う幕は四枚です。外側の二枚は一枚の幕としてかけられますが、内側の二枚の幕はいずれも「互いにつなぎ合せて」作るよう、神は指示しています。なぜ、そんな手間をかけるような指示をしたのでしょうか。つなぎ合わせるようにするためにはそれぞれの幕の端に輪50個の金の留め金を作り、それを通すための穴を開けなければなりません。これは大変な作業です。しかし、それをあえてさせたことに意味があるのです。幕と幕をつなぎ合わせて一枚にするための「金の留め金」には、右図のように、「青いひもの輪」があります。なぜ、青色なのでしょう。

●また、幕をつなぎ合わせる50個の「金の留め金」。なぜ50個なのでしょう。その数にも神のみこころが示されています。つまりその数は、後に述べる「五旬節」(五十日目)と密接なつながりがあります。やがて、主の例祭である「五旬節」(ペンテコステ)に聖霊が注がれるからです。



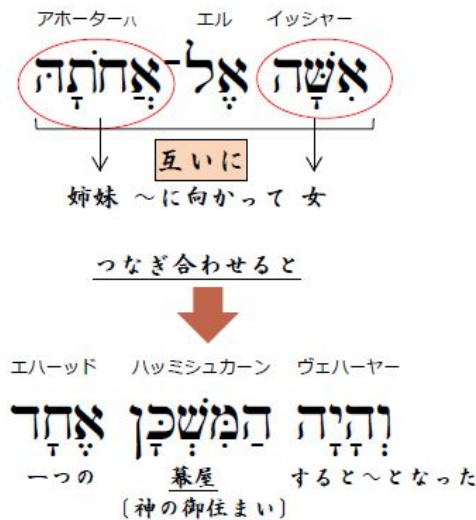
金の留め金
青いひもの輪(出26:4～5)



●幕屋のすべての部分には神の隠された意図があります。青は天の色であり、この二つを結びつけるのはキリストと御霊によって可能であることが啓示しています。使徒パウロもそのように「キリストにあって」、「御霊によって」と記しているとおりです。二枚の幕は「ユダヤ人」と「異邦人」を意味しているのですが、これを結び合わせるの、人間的な努力では不可能であることを「青いひもの輪」が象徴しているのです。また「金の留め金」はキリストの神性と力を象徴しています。この「金

HEBREW MIDRASH No.8

の留め金」と「青いひもの輪」によって、二つの幕を「互いに」つなぎ合わせて一つの幕(屋)にするのです。この「互いに」と訳されているヘブル語を見てみると、以下のようになっています。



●ちなみに、「イッシャー・エル・アホーターハ」(אֶל-אֲחֹתָהָ אִשָּׁה)の中にある「エル」(אֶל)は前置詞です。これと似た用法が創世記 32 章 31 節にあります。「パーニーム・エル・パーニーム」(פָּנִים אֶל-פָּנִים), これ「顔と顔を合わせて」という意味になりますが、直訳は「顔・に向かい合って・顔」です。ヤコブは「私は顔と顔を合わせて神を見た」と言って、その所を「ペニエル」と名づけました。他の例としては、民数記 12 章 8 節に「彼(モーセ)とは、わたしは口と口とで語り、明らかに語って、なぞで話すことはしない。」とあります。ここにある「口と口とで」の部分、「パー・エル・パー」(פֶּה אֶל-פֶּה)です。「イッシャー・エル・アホーターハ」、「パーニーム・エル・パーニーム」、「パー・エル・パー」、いずれも、互いに向かい合っている状態を表しています。

●上図にあるように、女を意味する「イッシャー」(אִשָּׁה)と姉妹を意味する「アホーターハ」(אֲחֹתָהָ)という語彙の中に、やがてキリストにあって共に組み合わせられる(結び合わされる)「ユダヤ人」と「異邦人」からなる教会(「エクレシア」ἐκκλησία)が啓示されていると考えることができます。ちなみに、教会は女性形です。

(2) 主の例祭—「七週の祭り」に秘められた神の啓示

●レビ記 23 章には主の例祭に関する規定が記されています。その章から、「五旬節」についての箇所を拾ってみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】レビ記 23 章 15~17 節

15 あなたがたは、(過越後の)安息日の翌日から、すなわち奉献物の束を持って来た日から、満七週間が終わるまでを数える。

16 七回目の安息日の翌日まで五十日を数え、あなたがたは新しい穀物のささげ物を【主】にささげなければならない。

HEBREW MIDRASH No.8

17 あなたがたの住まいから、奉獻物としてパン——【主】への初穂として、十分の二エパの小麦粉にパン種を入れて焼かれるもの——二個を持って来なければならない。

●過越の祭りにおいては、大麦を初穂として神にささげ、しかも「種の入らないパン」を七日間食べなければならなかったのに対し、「七週の祭り」では、主への初穂として新しい小麦粉にパン種を入れて焼いたパンを二個ささげなければならないということです。なぜ、パン種が入ったものなのでしょう。また、なぜ、それを二個なのでしょう。ここに隠された神の秘密があります。二個のパンは「ユダヤ人」と「異邦人」を意味しています。この二つのパンに罪を象徴する「パン種」を入れたものを祭司のところに持ってくるということは、あるがままで祭司を通して神に近づくことを意味しているのです。

●ユダヤ人たちは長い間、「七週の祭り」を行ないながらも、その意味することについては覆われていました。しかし今やメシアなるイエシュアと聖霊の注ぎの賜物によって、その祭りの真意を悟ることができるようにされたのです。しかしながら、この「奥義」を聖霊に満たされた弟子たちがすぐに悟り得たかといえばそうではありません。この「奥義」が明確に啓示されたのは使徒パウロが最初でした。そして他の使徒にも漸次示されていきます。

4. 教会が成長して神の御住まいとなるためのプロセス

●このように、ユダヤ人と異邦人が「組み合わされる」「ともに建てられる」ためには、ヘブル的ルーツを大切にする必要があります。イエシュアが語られた「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして・・・わたしの証人となります」(使徒 1:8)のみことばを、私たちは宣教的視点で理解し、聖霊の働きによって「力を受ける」ということにどうしても目を向けてしまいがちです。そのため、「五旬節(七週の祭り)」に聖霊が注がれたことによって、その祭りの啓示している事柄が成就したということには、なかなか気づかないのです。なぜでしょうか。その要因のひとつとして、伝道至上主義を挙げることができますが、それ以上に、置換神学の影響があります。その弊害は、キリスト教会がこれまでの歴史においてユダヤ的なルーツを断ち切ってしまったことによるものです。

●2世紀に入ると、ローマ帝国の政治的、また社会的事情により、キリストの教会内に反ユダヤ主義的傾向が入り込んできました。ローマ・カソリック教会は「新約にある信者は安息日を含め、主の例祭を祝わないように、祝う者は信者間の交わりから除名する。」との通告を出しました。この通告はキリストのからだである教会からユダヤ的ルーツを一掃することを意図するものでした。「ニカヤ公会議」(A.D.325年)において、主催者であったローマ皇帝コンスタンティヌスは、当時のユダヤ的ルーツを継承していた教会指導者を招待しませんでした。そのために、キリスト教会は元木であったユダヤ的なものを教会から切り離して、ヘレニズム(異教化)の道に進んでしまったのです。このことは今日に至るまで多大な影響を与えています。それゆえ今日、再び、ユダヤ的・ヘブル的ルーツに立ち戻る必要性が叫ばれているのです。そうでなければ、神のご計画も、神のみこころも、神の御旨も神の目的も、正しく理解することができないからです。ですから、

「立ち止まり、そして、振り返る!!」

●これが、今、キリスト教会に求められていることなのではないでしょうか。誤りを正しく改めるということは、とても難しいことです。私の属する日本神の教会連盟は、かつてアメリカで起こった神の教会改革運動の流れにあります。当時のアメリカの教派主義、分派主義の弊害に気づいて、改革者たちは聖書に立ち返り、「神の教会」の真理のために戦いました。エペソ人への手紙 2 章 21～22 節に記されているように、教会がユダヤ的ルーツを教会の中に保ちつつ、つなぎ合わせて行くことで、神のご計画に参与していく道に導かれようとしています。モーセの幕屋の中に、また主の例祭の中に神のご計画のマスタープランが啓示されているとするならば、それに対して、私たちは真摯に向き合うことが不可欠です。これがデイビット・H・スターン氏の言う「福音の中にユダヤ性を回復すること」でもあるのです。

21 この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

22 このキリストにおいて、あなたがたとともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

●上記のパウロのことばを、正しく偏見なく理解する必要があります。ヘブル的ルーツを欠いた聖書解釈は、必ずや逸脱を招きます。それどころか、逸脱していることにも気づきません。その証拠の一つは、神のご計画の成就として約束されている神のみことばを、自分たちの働きや活動のスローガンにして用いていることに見られます。このようなことは、みことば信仰と言いつつも、実は、神のことばを自分(たち)のために利用している一種の偶像礼拝です。自分としては良かれと思ってやっていることが、ますます神のご計画を見えなくしているのです。まさに、私自身がそのようなことをやって来た者の一人です。たとえば、イザヤ書 43 章 19 節の「見よ。わたしは新しい事をする。今、それが起ろうとしている。あなたがたは知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。」というみことばを握りながら、リバイバルを祈り求めて祈ったものです。とても励まされるすばらしいみことばなのですが、このみことばはメシアが王として地上に再臨してから実現する神の約束です。しかしこのようなみことばの霊的解釈の流れの中に身を置いていると、神のご計画における啓示を受け取ることができなくなるばかりか、確信をもって、御国の福音の希望を語れなくなるのです。

●終末に関係するさまざまな教えが混乱している昨今、その混乱の原因の根元には意識しようとしてまいと**反ユダヤ主義**があるように思われます。したがって、ヘブル的視点から聖書を読み直すことによって、神の永遠のご計画とみこころ、その御旨と目的がますます明瞭にされ、宣教の内容もパッケージ的なレベルから脱して、よりレベルの深い(高い)内容となって行くのです。今日のクリスチャンが堅い食物を食べて成熟しない原因は、パウロの言う「キリストにおいて、あなたがたとともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなる」にある「**ともに建てられ**」という意味の重要性に気づいていないからだと言えます。その意味において、「ヘブル的ルーツ」、および「福音におけるユダヤ性」が、真理のみことばによって回復される必要があると信じます。

The 8th HEBREW MIDRASH

2016. 2.22 銘形 秀則